神祭

奉祝 天皇陛下御即位二十年

三重県神道青年会報 第35号

会長挨拶

会長　中野哲彦

この度、テーマ「絆深く、広げる輪・和」と題し、三重県神道青年会は本年、創立六十周年記念大会を開催しました。この大会の最後に、会歌「輝け、夢高く」を参加者全員総立ちで、大合唱できたことは、大変嬉しく、当日までの心配や苦労は一気に吹き飛んでしまいました。

つい数ヶ月前まで、限られた者が記念大会の準備をし、役員間は協調性に欠け、ここにもアメリカ的教育の影響が出ているのかと感じていました。

日本は戦後、欧米化の波に押され、特に個を尊ぶアメリカの教育の影響を大きく受け、本来の日本人の良さを見失い、家族や地域の絆は希薄となりつつあります。

しかし、そのアメリカで、9・11の同時多発テロ以来、人は助け合わなくては生きていけず、個を主張することは間違いであると気づき始めたといいます。

今、アメリカでは空前の日本漫画ブームです。そもそも、アメリカの漫画と言えば、スーパーマンやスパイダーマンなど個を主張するヒーローものが多くあります。それに対し、日本の漫画は、様々なストーリーがあり、例えば、ドラゴンボールのようなグループで団結して敵と戦っていく、また、クレヨンしんちゃんのような家族を題材に、仲睦まじい光景が描かれているなど、協力し合う内容です。そこがアメリカ人に受けているのです。

協力し合うには歌です。歌を合唱すると、人と人との絆を結び、輪が広がり、協調性が出てくるものと信じ、この歌が参加者全員で合唱できれば成功であると、自分自身に言い聞かせ、事有る毎に、全員で歌うよう努めました。そして、祝賀会最後の合唱で全員の心が一つになり、歌の威力を改めて感じ、会歌を作って良かったと安堵しました。

この周年事業には多くの方より格別なるご理解とご協賛を賜り、激励のお言葉をお掛け頂きましたこと、厚く御礼申し上げます。また、二年間、ご指導頂きました諸先輩方、共に活動してきた役員、会員の皆様に感謝の意を表しますと共に、益々会の絆を深め、残る六十周年事業の展開を期待します。

副会長挨拶

副会長　神田　基

平成十九年四月に副会長、渉外・福祉委員長という大役を拝命して以来、早くも二年の歳月が過ぎようとしております。この間中野会長、役員、会員を始め斯界の皆様のご協力を賜り、大過なく務めさせて頂きましたこと先ずもって厚く御礼申し上げます。

さて、本年度の渉外・福祉委員会は、矢野理事・宮崎理事・菱川理事・渡邊理事の四名が各行事を担当し、責任をもって企画、運営をしてくれました。これらの行事を成功裏に終える事が出来ましたのも、彼らのお陰と深く感謝しております。

今期、初めて副会長に選任を頂き、自分自身得るものが多くありました。中でも一番大きかったことは東海地区協議会や神青協への出向です。今までは何をするにしても三重県の枠を出ることはありませんでしたが、様々な県の人たちに出会い、話し合うことにより客観的な目で三重神青を見ることが出来たのです。その様な目で改めて会を見つめ直すと、「若さ」「熱意」「団結力」が希薄に思えてなりませんでした。この三つこそが青年の原動力であるはずなのに、これを無くして何が青年会ぞ！と痛感したのです。これでは創立六十周年事業の成功はおろか、この先十年二十年と三重神青は存続していけるのか？大変な危機感を持ったのです。

神青は若者らしく、行動力のある会でなければなりません。その為には先ず会員がこの会に自信と誇りを持ち、一致団結していなければなりません。周年事業の「会歌作成」はその為の第一歩だったのです。果たして「会歌作成」が周年事業に相応しいものなのか？皆様からの大切な協賛金をこの事業に費やして良いのだろうか？正直不安もありました。しかし結果は三月十七日・四日市都ホテルでご覧頂いた通りです。我々はOB・現役関係なく手を振り肩を組み合って会歌を熱唱し、心を一つに結ぶことが出来ました。しかしこれが終わりではありません。ここからがスタートなのです。強く結んだ絆を胸に、全会員一丸となって新たな一歩を踏み出しましょう。今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

副会長挨拶

副会長　吉田吉里

昨年四月より任期半ばではありますが、佐藤副会長の後任としてその職をお引受することになりました。これまで一度も県神青への出向経験がなく、その職責の重さを痛感しております。一日も早く会員の和にとけこむことと自己研鑽とを課題として取り組んで参りました。この一年、中野会長を始め役員、会員諸兄からご指導、ご協力を賜りました事に、まず御礼を申し上げます。

私は、総務・広報委員長として年二回の「神青通信」と会報「榊葉」の編集を担当しました。各研修会や諸行事毎には、参加者には早めの原稿依頼を心掛けました。「神青通信」という性質上、頂いた原稿全てを載せることは出来ませんでしたが、「榊葉」に掲載させて頂きました。関係各位には無事発行ができましたこと篤く御礼を申し上げますとともに、快く原稿をお引き受け頂きました会員の方々、また委員の皆様には長時間に亘る編集会議、発送作業等に積極的にご参加を頂き有り難うございました。

また、就任当初より創立六十周年記念事業に向けた取り組みとして三役会、四役会を経て実行委員会を立ち上げ、九月の臨時総会では創立六十周年記念事業計画をご審議いただきました。同じく九月には、OB会を開き六十周年事業計画案を先輩諸兄にご披露することが出来ました。そして、本年三月には創立六十周年事業記念大会を無事終えることが出来ました。関係各位の熱意と実行力により盛大に執り納めできましたこと衷心より御礼申し上げます。

この一年を振り返りますと、恒例の役員会は十二回を数え、実行委員会、四役会と諸行事に参加し、月に二、三回は、皆さんと顔を会わせていたように思います。中野会長を柱に、六十周年のテーマが「絆深く、広げる輪・和」と決まり、周年事業に向けた取り組みの中で、間違いなく皆様との絆は深まったと思います。恒例行事の「お宮の子供会」が中止となったことは残念でしたが、その分課題も見えて来たと思います。周年事業はまだ終わっていませんが事業完遂に向け皆様の積極的なご参加を期待しております。

副会長挨拶

副会長　石上陽祥

本年は、畏くも今上陛下におかせられましては、御即位二十年、両陛下御結婚満五十年の佳節を迎えられましたこと心よりお慶び申し上げます。

この佳き年に三重県神道青年会は創立六十周年を迎えました。これも県内県外の諸先輩方又同志の方々のご尽力があっての事と、心より感謝申し上げます。

さて、副会長の重職に選任されてより早二年過ぎました。委員長を務めました教化研修委員会の事業を振り返ってみますと、氏青神青合同研修会では多度大社にて「神社における装束のいろいろ」と題し研修をおこないました。装束については、神青会員が衣紋者となり、氏青の方に正服を著装してもらいました。

大麻頒布促進運動では遠藤理事の彌都加伎神社にて団地等を廻り大麻頒布をおこないました。県外研修では、出雲大社へ行き御本殿を拝観させて頂きました。諸事業おこなってまいりましたが、残念なのは委員一丸となって進めてきた「お宮の子供会」を諸事情により中止したことです。今後は更に青少年育成教化を考え、より良い「お宮の子供会」にできるよう進めていきたいと考えます。

副会長を務めさせて頂いた此の間、神道青年東海地区協議会より神青協「神宮式年遷宮の〝ここころ〟を守り伝える委員会」（以下遷宮委員会）の委員を務めさせて頂きました。遷宮委員会での事業として「神主さんの伊勢街道参宮団～全国の〝ここころ〟を絵馬に託して～」を開催しました。四日市市の日永の追分けから内宮まで、全国より約三百人の神青会員が徒歩で進み、神宮へ全国からお預かりした紙絵馬を奉納しました。途中お世話になった各神社の宮司様を始め皆さまには心より御礼申し上げます。

遷宮委員会で得た経験を県神青の事業にフィードバックできたらと考えます。

今後、県神青のあり方をみんなで考え、一層活発な活動を行っていきますので、諸先輩方、会員諸兄またご家族のご支援ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

三重県神道青年会創立六十周年記念事業

三重県神道青年会が結成されて以来、創立六十周年を迎えることとなりました。この佳節を祝い「絆深く、広げる輪・和」をテーマに、以下の諸事業を展開することとなりました。

臨時総会

平成二十年度臨時総会が九月十二日(火)、グリーンパーク津にて中野会長以下役員、会員二十名の出席にて開催された。

開会儀礼の後、会長挨拶、その後石上副会長を議長に選出し議事へと移った。

まず会長より創立六十周年事業計画案が説明され、次に事務局より創立六十周年事業予算案が説明され、夫々承認された。引き続き役員補選が行なわれ、会長指名理事に新山英洋君、木村浩二君が指名され、臨時総会は滞りなく終了した。

神青歴代役員OB会

九月十八日(木)、ホテルグリーンパーク津に於いて、神青創立六十周年記念事業として、OB二十五名、現役員十六名、会員五名の参加を得て盛大に開催された。

始めに、全員で物故会員の冥福を祈り黙祷をした後、神宮遥拝、国歌斉唱に続き会長の挨拶で幕を開けた。

石上庁長の挨拶の後、OBを代表して第四代会長宇治土公貞幹様が挨拶され、戦時中の体験等、神道青年会の結成に当たっての経緯や、結成後、斯界が直面してきた幾多の困難に青年神職として、いかに立ち向かっていかれたのかを拝聴した。その後、各副会長より現在の活動状況や六十周年記念事業についての説明が行われ、議事は終了した。

懇親会では、大先輩の皆様方より、貴重なお話を伺うことができた。

（福井健士　記）

他県神道青年会創立六十周年記念式典参加

本年度、当会と同様に創立六十周年の佳節を迎えた、東海地区の各単位会に参加させて頂いた。

○愛知県神道青年会
創立六十周年記念式典
日　時　平成二十年六月二十日
場　所　熱田神宮会館
参加者　会長以下五名
内　容　熱田神宮正式参拝・式典・祝賀会

○長野県神道青年会
創立六十周年記念式典
日　時　平成二十年十一月十日
場　所　長野県神社庁
参加者　会長以下四名
内　容　奉告祭・記念植樹・式典・直会（会員手作りによる郷土料理の振舞い）

会歌作成

九月十九日(金)、会長始め記念事業委員は、六十周年記念の中心的事業である会歌作成にあたり、製作会社のイントロダクションの紹介により、名古屋市内のスタジオでレコーディング作業に参加した。

会務報告

〈平成二十年四月〉
一〇日　神社総代会定例総会　八名助勢奉仕　神宮会館
一七日　第一回役員会　一七名出席　神社庁
一七日　平成十九年度総会　二七名出席　神社庁
二四日　第六十回神青協定例総会　三名出席　神社本庁
〈五月〉
一三日　神道青年東海地区協議会　三名出席　手力雄神社
二六～二八日　神青協『神主さんの伊勢街道参宮団』一九名参加
〈六月〉
二日　第二回役員会　一二名出席　結城神社
新職員交流会　二四名参加　結城神社
一〇日　創立六十周年準備委員会　八名出席　三重縣護國神社
二〇日　愛知県神道青年会　創立六十周年記念式典　五名参加　熱田神宮会館
二三日　創立六十周年準備委員会　五名出席　三重縣護國神社
二四日　中部ブロック研修会　八名参加　伊賀焼伝統産業会館
〈七月〉
三日　神道青年東海地区協議会　四名出席　南宮大社
八日　第三回役員会　一三名出席　神社庁
一七日　神宮・南部ブロック研修会　一八名出席　大豊和紙工業

当日は、作曲者の原淳氏、歌手の河原龍夫氏と、会議等で会員が事前に話し合ったイメージをもとに歌詞の推敲や曲のアレンジなど、全員で意見をまとめ、一つの曲として表現した。また、当日の参加会員で「三重県神道青年合唱団」としてコーラスにも参加したが、一つのマイクを会員で囲み歌う際は、皆緊張しながらも、これが今後歌い続けられていくという思いで精一杯の声を出した。その後はジャケットのデザインなど試行錯誤の後、ようやく完成となった。

完成したこの会歌が、今後の会の発展の一助となることを期待する。

（吉田実生　記）

【歌手・作詞者・作曲者プロフィール】

○歌手　河原　龍夫

歌手活動の傍ら、自身のバンドでライブ活動を展開し、CBCラジオ「河原龍夫のヒットパラダイス」他に出演中。

○作曲者　原　淳

現在作曲を中心に活動。CD製作他、CM・舞台・映画音楽などを手掛ける。過去にはNHK「中学生日記」の曲なども手掛ける。

○作詞者　盛　高志

自らの音楽活動で作詞作曲の他、自ら劇団アルクシアターを主催し、劇作家・演出家としても活動している。

記念大会

三月十七日(火)四日市都ホテルを会場に開催され、百二十余名の参加者が集まった。当日は奉告祭・式典・講演会・祝賀会の四部構成で行なわれた。

奉告祭では、神田副会長を斎主に斎行され、斎主・参列者が神宮の弥栄と斯界の発展とを祈念した。

式典では、中野会長が三重県神道青年会六十年の歴史を受け継ぎ、今後も一致団結のもと年輪を積み重ねて行く決意を表し、来賓諸氏よりは、温かいお言葉を頂戴した。

講演では本事業の一環として作成した当会の会歌「輝け、夢高く」の歌手、河原先生より「絆」についてのお話を拝聴した後、会歌をご披露頂いた。

祝賀会では来賓祝辞に続き鏡開きが行なわれ、その美酒で乾杯した。清興として、ご講演頂いた河原先生、会歌作曲者の原淳氏やサブボーカルのアミさんの三名が歌で宴を盛り上げた。最後は参加者全員で会歌を熱唱し盛大裏に幕を閉じた。

今後の事業予定

一、神宮別宮新御敷地清掃奉仕
一、宇治橋渡始式奉仕
　平成二十一年十一月三日
一、創立六十周年記念誌の発行
　平成二十一年十二月発行予定

二四日　北部ブロック研修会　一九名参加　海山道神社
〈八月〉
七日　第四回役員会　一五名出席　神社庁
二六～二八日　神青協夏期セミナー　五名参加　國學院大學
〈九月〉
四～五日　神道青年東海地区協議会及び教化研修会　九名参加　岐阜市内
一二日　平成二十年度臨時総会　二一名出席　グリーンパーク津
第五回役員会　一七名出席　グリーンパーク津
一四日　上野・阿山氏子青年の集い　三名参加　勝手神社
一八日　歴代役員OB会　四六名出席　グリーンパーク津
二四日　全国敬神婦人連合会　常任委員会助勢奉仕　三名奉仕　スペイン村
二五日　全国敬神婦人連合会「三重大会」助勢奉仕　一七名奉仕　サンアリーナ
〈一〇月〉
一五日　第三七回初穂曳　二名参加　外宮
二七日　全国敬神婦人連合会「三重大会」反省会　六名出席　神社庁
三〇日　三重県神社関係者大会　助勢奉仕　神宮会館
第六回役員会　一三名奉仕　神宮司庁
一五名出席　神宮神青・県神青合同研修会

定例総会

平成十九年度定例総会が四月十七日(木)、神社庁会議室にて中野会長以下役員・会員二十七名、来賓二名の出席にて開催された。

開会儀礼の後、会長挨拶、来賓の榎本浄三重県神社庁青年会担当理事・居附秀樹三重県氏子青年協議会長より祝辞を頂戴し、その後石上副会長を議長に選出し議事へと移った。

まず会長より十九年度会務報告、事務局より会計決算報告、監事より会計監査報告が行われ、夫々承認された。引続き佐藤副会長転任に伴う役員補選が行われ、新副会長に吉田吉里君が指名された。次に二十年度活動方針案並びに事業計画案、同会計予算案が審議されて承認を受け、最後に三重県神道青年会基金を創立六十周年予算に繰入れる案件について審議された後、承認され、定例総会は滞りなく終了した。

新職員交流会

六月二日(月)、結城神社に於いて開催され、会長を始め二十四名(新職員十一名)が参加した。

当日は生憎の雨となり、武道場内にてインディアカが行われた。

各ブロック毎に三名ずつのチーム分けを行い、トーナメント方式にて試合が行われた。外は雨ながらも、それを忘れさせるような好プレーや珍プレーが飛び出し、会場内が拍手や笑い声で包まれた。

試合はチームワークに優れた中部チームが優勝を果たし、熱戦は幕を閉じた。

終了後、結城神社にて表彰式や懇親会を行い、お互いの健闘を称え合い、また新入会員の自己紹介なども行われ、より親睦を深める事が出来た。　(木村浩二　記)

県外研修会・出雲大社特別拝観

七月二十九日(火)・三十日(水)の二日間に亘り行われ、中野会長を始め会員八名と内保元会長を含む九名が参加し、電車にて玉造温泉に向かった。

二日目、いよいよ出雲大社の本殿拝観の時がやってきた。千家禰宜のご案内で八足門より御垣内に歩を進める。

殿舎の歴史や建築様式、柱の形状等の説明のほか祭典時の献撤饌の場や祭員の作法等詳しく説明して頂いた。殿舎内部の八雲の図も拝観させて頂き、しばし心は神代にタイムスリップした気分であった。

貴重な拝観を終えた後は隣接する古代出雲歴史博物館にて更に知識を深めた。平安期の壮大な出雲大社の模型やこの地方の人々の暮らしぶり等、興味深い内容であった。

六十年に一度という大変貴重な経験ができた。　(福井健士　記)

〈一一月〉
一〇日　長野県神道青年会創立六十周年記念式典　一六名参加　神宮参集殿
二六日　四名出席　長野県神社庁　神青協臨時総会
二九日　三名出席　神社本庁　第七回役員会
〈一二月〉
三日　九名出席　多度大社　氏子青年協議会・神道青年会合同研修会　九名参加　多度大社　神宮大麻頒布促進運動　二四名参加　鈴鹿市南玉垣町　第八回役員会
五日　一一名出席　彌都加伎神社　敢國神社例祭助成奉仕　五名奉仕
六日　神道青年東海地区協議会　三名出席　金神社
一〇日　忘年会　二四名参加　鈴鹿市内
一九日　創立六十周年実行委員会　三役会・式典部会　一〇名出席
〈平成二十一年一月〉
二六日　第九回役員会　一二名出席　猿田彦神社　新年会　二五名参加　伊勢市内
〈二月〉
六日　建国記念の日啓発活動(北部ブロック)　九名参加　四日市駅前　建国記念の日啓発活動(中部ブロック)　六名参加　津駅前　建国記念の日啓発活動

神青協夏期セミナー

八月二十六日(火)～二十八日(木)の三日間に亘り國學院大學にて開催され、当会より五名が参加した。本年は五つの分科会に分かれての研修となった。私達は、「家族」を主題にした分科会に参加し、現代社会の核家族化の現状について討議した。

現在でも祖父母がいる大家族では、学校では教えられない「先祖の話」「歴史の話」「道徳の話」などを家庭で教えていくことが出来る。しかし、核家族ではそれが出来ないため、勉強は出来るが道徳が備っていない子供が増えている。戦前、世界でも模範とされ国民が暗唱できた教育勅語が今では家庭から消えかけている。核家族化は良き伝統・風習・知恵などの伝達をも断ち切ってしまっている。

このような現状を少しでも打破し、より良い日本に変えて行くには、私達神職が社頭講話などを通じて「教育勅語」「大家族の大切さ」などを広め、大家族における祖父母の役割を担い、子供達に徳育を涵養して行かなければならないと感じた。　(遠藤嘉章　記)

初穂曳

十月十五日(水)、外宮領陸曳が行われ、当会より二名が奉仕した。

当日は快晴であり、気持ちの良い秋空が広がり清々しい中、全国各地から集まった約六百人を含む約三千人と共に、奉曳車の綱を引き、外宮に初穂を奉納した。

午前十時、皇學館大學の学生たちの奉曳車を先頭に、外宮まで約一キロの地点から出発。「エンヤー」のかけ声のもと、綱を握り外宮へ向かった。私達は一日神領民として、四番車を奉曳した。午後二時、無事外宮に曳入れることができた。

その夜、十時より豊受大神宮での由貴夕大御饌の儀に参列させて頂いた。外宮参道に初穂曳奉仕者が整列し、祭主以下奉仕神職が参進の後、外宮拝礼所前にて祭典を奉拝した。当然乍、真っ暗闇で中の様子は窺うことはできない。目を閉じ、祭典が悠久の昔より連綿と斎行されている事に思いを馳せると、神職として変わることなく次の世代に残していかねばならないと再認識させられた。

(宮崎吉史　記)

神道青年東海地区協議会教化研修会

九月四日(木)・五日(金)岐阜県内で開催され、三重県からは会長を始め九名が参加した。

今回の研修主題は、「伝統文化に息づく日本人の心」～郷土の刀鍛冶に学ぶ～とされ、岐阜県関市にある関刃物伝承館で行われた。当日は、刀匠三名による刀の鍛錬の様子や刀の研ぎ、また鞘造りなど伝統の技を間近で見学させて頂いた。続いて、刀の町から生まれたカミソリ会社フェザーの工場並びにフェザーミュージアムの見学を行った。

刀鍛冶の技術は確実に郷土のフェザーに受け継がれて、今なお息づいていると感じた。その後、会場を岐阜市内に移して総会が開催された。

翌日は、岐阜メモリアルドームにおいて地区対抗のフットサルが行われた。皆、真剣な眼差しでボールを追ったが、思うような結果は残せなかった。

(吉田吉里　記)

〈南部ブロック〉
七日　四名参加　おはらい町　建国記念の日啓発活動
〈神宮ブロック〉
一二日　五名参加　宇治橋前　東海地区協議会遷宮啓発研修会
一八日　九名参加　神宮司庁　第十回役員会
一一名出席　神社庁
〈三月〉
五日　第十一回役員会　一四名出席　神社庁
八日　三重縣護國神社合祀祭助勢奉仕　七名奉仕　神青協中央研修会前日準備助勢奉仕
九日　六名奉仕　熱田神宮会館
一〇～一一日　神青協中央研修会　一二名参加　名古屋市内
一一日　創立六十周年実行委員会　二六名出席　四日市都ホテル
一七日　創立六十周年記念大会　三九名出席　四日市都ホテル
〈四月〉
七日　役員会　一三名出席　神社庁

表紙解説

本年も三重県神道青年会の活動の一つを表紙にさせて頂いた。この「建国記念の日啓発活動」は、今年で六年目を迎えた。受け取る側には、ようやく定着し、嬉しい限りであるが、配り手の私達の顔触れも固定してきてしまった。ぜひ、寒風吹き荒ぶ中一緒に活動することで、お互いの絆を深めて行きたいものである。

第三十九回 上野・阿山氏子青年の集い

九月十四日(日)、阿山地区氏子青年協議会主催により伊賀市山畑の運動場で開催され、当会からは三名が参加した。

地元の勝手神社に正式参拝の後、運動場に移動して総会が開催された。開会式の後、地元の神社に古くより伝わる獅子舞や若者グループによる演舞が行われた。伝統的な神事と現代風のダンス、その対比に面白さを感じた。

当日は天気も良く心地よい風に秋を感じさせる中、東の空より中秋の名月が顔をのぞかせる頃、乾杯となった。私たちは、猿田彦神社(伊勢市)と志氏神社(四日市市)の氏子青年会の方々と席を共にさせて頂き、お酒を酌み交わしながらお宮を護るために日々奮闘されている様子を拝聴させて頂いた。

この会に参加させて頂いて改めて神社という所は氏子の皆様の厚い誠心に支えられているのだと実感した。

(福井健士　記)

氏子青年協議会との合同研修会

十一月二十九日(土)、桑名市鎮座の多度大社にて開催され、会長を始め、三重県氏青居附秀樹会長、全国氏青東義彦副会長ほか氏青・神青計二十六名が参加した。

神青が主幹として行われた今回の研修会では、氏子青年の方々に、より神社・神主への興味を深めてもらおうと「神社における装束のいろいろ」と題して、研修会を催した。

研修では、居附さん、東さんに衣冠を著けて頂いた。装束の構造や著け方、また職階による色の違い、装束の由来などを説明すると、正に目から鱗のような氏子青年の方々の表情が印象的であった。

神社と関わりの深い人たちであっても、神社の専門的な話はやはり新鮮で、「教化」という意味において有意義な研修会となった。

(吉田実生　記)

神宮神道青年会との合同研修会

十月三十日(木)午後五時より、内宮参集殿を会場に開催された。本年は、吉川竜実神宮権禰宜をお招きして「宇治橋渡始式について」と題して御講演を頂き、両会より会長を始め四十八名が参加した。

宇治橋の説明から始まり、起源や現在に至るまでの歴史、また渡始式の儀式内容などについて、資料を基に事細かに説明頂き、大変分かり易く興味深い内容であった。中でも、全国より一家で三代揃った夫婦が橋を渡るのは、三夫婦が家門隆昌と福徳円満を象徴しており、その長寿にあやかって橋の安全を祈念するという事など、私事ながら勉強不足を多々痛感させられた。

式年遷宮より四年前に先駆けて行われるこの宇治橋渡始式を控え、二十年に一度行われる式年遷宮が徐々に近づいている事を実感し、神職として身の引き締まる思いがした。

(木村浩二　記)

神道青年東海地区協議会 遷宮啓発活動研修会

二月十二日(木)正午より四十一名が参加のもと(当会より九名)開催された。

当日は、まず内宮にて御垣内参拝を行った後、神宮司庁会議室に於いて「式年遷宮の継承～式年遷宮への先人達の思い、我々からの継承～」と題し、河合真如神宮権禰宜・音羽悟神宮宮掌を講師に迎え、お話を頂いた。

第一回式年遷宮から今までの間、決して全てが順調だった訳ではなく、国民は手を携え尽力を絶やすことなく守り続けてきた。遷宮を「式年」とすることによって先人達の思いが引き継がれ、その思いの一端を知るとともに、今後への意識を固めることができた。

また、夕刻より懇親会も開かれ、他県の青年神職とお互いに意見交換をし、懇親を深めることができた。

(千秋季嗣　記)

大麻頒布活動

十二月三日(水)、本年は鈴鹿支部の彌都加伎神社の氏子区域において行われ、中野会長を始めとして神青会員や神宮研修所の学生も集まり、総勢二十四名が参加した。

当日は晴天に恵まれ、神社の氏子区域を五つの班に振り分け、午後一時半より頒布を開始した。午後四時過ぎには予定していた地域を廻り、全体で八十七体を頒布することができた。平日の昼間という時間帯であった為か、不在の家もやや見受けられたが、順調に頒布することができた。しかしながら、今回新規に開拓を試みた地域では、神宮大麻を勧める以前に門前払いされるケースが多く、頒布の難しさを知ると共に厳しい現状を認識せざるを得ず、結果として四体の頒布に滞った。

今回の頒布活動に参加し、神宮大麻をお祀りする習慣のない家庭には「神社」というよりも「宗教」そのものを危険なものと考え、関わりを持つ事を避けている感じがあり、非常に残念だった。このような事態を打開する為にも一神職として様々な知識を深めるなど、一人一人がより一層の努力をすると共に、例え挨拶程度の会話でも、地域の人々や参拝に来られた方々と地道にコミュニケーションを重ね、信頼を得られるよう心掛けなければならないと感じた。このような努力や信頼を得てゆくことが、ひいては頒布数の増体にも繋がるのではないかと思う。もちろん頒布数のためにのみではなく、平素から神職として心掛けるべきことであり、これらの事に充分留意しつつ、今後の神明奉仕に励まなければならないと痛感した。

(木村浩二　記)

神青協中央研修会

三月十日(火)・三月十一日(水)の両日、名古屋マリオットアソシアホテルに於いて開催された。本年は東海地区協議会が主管となり愛知県神道青年会の担当で行われた為、当会も研修会前日より準備に助勢した。

当日は全国より約三百五十名の青年神職が集い、三重県からは中野会長を含め十一名が研修会に参加した。主題は「修理固成せ」～国づくりは人づくり、模索から実践へ～と題して行われた。

第一講は「モノづくり・まちづくり・夢づくり」と題して造形作家の夢童由里子先生により講義を受けた。先生が中心となり名古屋城本丸御殿の復興再建に取り組まれている活動を通し、人々の意識がどのように変化してきたかを紹介して頂いた。

第二講は「目標をもった人づくり(金メダルを目指す師弟関係)」と題して中京女子大学レスリング部監督、栄和人先生から講義を受けた。先生は選手時代に挫折を味わい、そこから這い上がりオリンピック選手に選ばれた。しかし、メダルには手が届かなかった。そこで、監督となって、自分の果たせなかった夢を若い女性選手に託した。指導者として三人のオリンピックメダリストを育て上げた経験談を中心に、いかにして選手に目標を持たせるかなど指導論・教育論について熱く語って頂いた。

第三講は「地域社会の元気を神社から取り戻そう」と題して、皇學館大學社会福祉学部長・教授である櫻井治男先生による講義を受けた。地域社会になぜ元気がないのか。少子高齢化のためなのか。はたまたそれ以外に原因があるのかなど、先生が専門とされている社会福祉を織り交ぜながら、宗教の地域への貢献や神職の資質向上が大切であると伺った。

日本は今、未曾有の危機に瀕している。それを克服するためにも神社が社会のコミュニティーの中心となり、地域社会に貢献していくこと。人々に夢を持たせ叶えさせるようにしていくことが大切である。今後それらを実現させるためには、一層努力していかなくてはならないと改めて考えさせられた研修会であった。

(楠　直幹　記)

第七回 ブロック研修会

本年も各ブロックで研修会を企画・運営した。三重県神道青年会六十周年記念大会を控え、準備期間は短かったが、それぞれのブロックが趣向を凝らした研修会を開催した。

北部ブロック

テーマ
「稲荷信仰について」
「これまでの人生・現在の活動」

講　師　海山道神社宮司　林　一翁
畑中ボクシングジム　会長　畑中清詞

開催日　七月二十四日（木）

場　所　海山道神社（四日市市）

参加者　二十一名

当日は、正式参拝に続いて研修が始められた。研修では海山道神社宮司林一翁先生から「稲荷信仰について」と題した講話を頂き、その後元WBC世界チャンピオンの畑中清詞先生より「これまでの人生・現在の活動」と題して座談会を行った。

畑中先生は、チャンピオンに成るまでの過程や、現在ボクシングを通して青少年の健全育成に取り組んでいる活動についてお話された。「皆さん志をもってやるからには、人生を賭けて生きて下さい」と語られ、熱い口調に参加者全員が心打たれた。宗教離れが叫ばれる現在、畑中先生のような熱い気持ちで青少年に教化活動をしていかねばならない時代だと感じた。何事も情熱を持って取り組むことが大切であり、先ずは相手に自分の気持ちを伝えることである。特に、自分の「熱意」がなくては物事が進まないことを学んだ。

（松瀬弘喜　記）

中部ブロック

テーマ　「伊賀焼」

講　師　福森茂雄（景山陶苑）

開催日　六月二十四日（火）

場　所　伊賀焼伝統産業会館（伊賀市丸柱）

参加者　八名

当日は、まず伊賀焼伝統産業会館の二階の資料室にて、伊賀焼の歴史や特徴、また昔の作業工程について講義を頂いた。伊賀焼の粘土は、現在もこの地域で産出される古琵琶湖層の良質な土が使われ、高温で焼かれた陶器は「ワビ・サビ」を感じさせる素朴なものが多く、茶人に受けが良いと伺った。

その後、実際にろくろを使って各々作陶に取り組んだ。初めは皆、慣れない手つきであったが、講師の手解きをうけながら徐々にろくろを操る手も滑らかになってゆき、一時間後には参加者の力作が出揃った。

日頃は出来ないような貴重な体験と伊賀地域の伝統に触れ、大変有意義な研修会であった。

（福井健士　記）

南部・神宮ブロック

テーマ　「伊勢の和紙について」

講　師　大豊和紙工業株式会社　社長　中北喜得

開催日　七月十七日（木）

場　所　大豊和紙工業株式会社（伊勢市大世古）

参加者　十八名

当日は、中北社長より神宮の御師龍大夫家の邸宅跡に工場が建っている経緯から神宮の御料「和紙」を漉く工場であること、また県内には和紙を漉く工場がここ大豊和紙しかないなど興味深いお話を拝聴した。

また、「なぜ伊勢和紙というのか」など、いつも講演会で質問される内容を詳しく説明して頂き、伊勢和紙とは何なのかを知ることができた。

近年では和紙の新しい活用方法として、和紙に写真を印刷（インクジェットプリンタ）するサービスを始められたそうである。（吉田吉里　記）

建国記念の日の啓発活動

北部ブロック

活動日　二月六日（金）
午後四時～

場　所　近鉄四日市駅前
ふれあいモール

参加者　九名

当日は冷たい風の吹く中、各所に建国記念の日啓発の旗を立て、「建国記念の日をお祝いしましょう」と、道行く人、ひとりひとりに声を掛けながら、花の種と建国記念の日の意義を書いたチラシを手渡した。例年なら、私達の姿を見ると目を反らす人や、足早に去って行く人が多く見られたが、今年はそういった姿はあまりみられず、逆にこちらへ貰いに来てくれる方や、「いつものやつね」と受け取って行く人など、少しずつではあるが、今までの活動が定着しつつある事を実感でき、これからもこの活動を続けて行こうと、全員が心を新たにした一日であった。

（遠藤玲　記）

中部ブロック

活動日　二月六日（金）
午後四時～

場　所　近鉄津駅前

参加者　六名

当日は、三重縣護國神社に集合し、改服ののち約二時間、昨年同様に建国記念の日の意義が書かれたチラシに花の種を添え、中高生など若年層を対象に啓発活動を行った。本年も会員が積極的に声をかけ、説明することにより、多くの方に頒布することができた

今回の活動により、多くの方が建国記念の日を始め祝祭日を奉祝し国旗を掲げて頂くことを願うものである。

（宮岡利彦　記）

南部ブロック

活動日　二月六日（金）
午前十一時～

場　所　おかげ横丁前

参加者　四名

南部ブロックでは、昨年の経験を生かし、本年もおかげ横丁前で頒布する事となった。

開始が午前十一時という事もあり、平日にもかかわらず昼食に来た多くの人で賑わっており、用意したチラシを配り終えるのに一時間もかからなかった。数年前よりこの場所に活動を移してから、神宮に参拝にみえた全国よりの参拝者に「建国記念の日をお祝いいたしましょう」と声をかけ、昨年から幟旗を持参した事も相まって、当初の予想を大幅に上回るペースで順調に頒布する事が出来た。当日は若者のグループをはじめ家族連れ・団体等、大勢の方々にこの活動を通じて改めて建国記念の日の重要さを理解して頂けたのではないかと感じる。

（小倉孝之　記）

神宮ブロック

活動日　二月七日（土）
午後一時～

場　所　内宮宇治橋仮橋前

参加者　五名

神宮ブロックは、内宮宇治橋仮橋前で啓発活動を行った。啓発用ポスターと幟旗を準備して、花の種を片手に配り始めると、あっという間に長蛇の列となってしまった。大変うれしい悲鳴であったが、我も我もと手を出されるので、ゆっくりと建国記念の日の説明が出来ず、暫く配るのを止める一幕もあった。若い方に建国記念の日を知って頂こうと声を掛け、一時間半程すると全ての種を配布し終えた。どれだけの方に理解して頂けたのか分からないが、こうした機会を捉えてゆくことは大切であると実感した。

（吉田吉里　記）

神主さんの伊勢街道参宮団

実施日　五月二十六日(月)～二十八日(水)

御礼

皆様には三日間のご参加並びにご助成ありがとうございました。事故もなく無事に全行程約八〇キロを終えることが出来ました。全国より、二六日九〇名、二七日一〇〇名、二八日一一〇名、延べ三〇〇名で、重複者を除きますと一七〇名にご参加頂きました。全国から集まった紙絵馬の奉納枚数は、一八、〇〇〇枚でした。

続いて県内の参加人数ですが、二六日一〇名、二七日一一名、二八日一〇名が歩き、この他懇親会のみご参加頂いた方が他に一一名おりました。また、三重県内から集まった紙絵馬の枚数は、七〇〇枚でした。

（神青協選宮委員・石上陽祥）

第一日（三十二キロ）

二十六日、四日市駅近くに鎮座する諏訪神社に集合し、菅笠・柄杓・地図・全国より集められた紙絵馬を受け取り参拝・開会式の後、電車にて追分まで移動。久富真人神青協会長を先頭に、全国より集まった青年神職が、一路津市をめざして出発した。途中、彌都加伎神社（鈴鹿市）にて昼食をとり再出発。

後半になると歩くことで精一杯になり、もし一人で歩いていたら諦めていたが、共に歩いて頂いた先輩方の存在が大きな助けになり、無事に三重縣護國神社まで歩くことができた。この経験を力にして日々の社頭奉仕を頑張りたい。

（宮岡利彦　記）

第二日（二十二キロ）

二十七日、三重縣護國神社に八時半に集合し、神前にて出発式が行われた。その日はよく晴れて気持の良い日であった。第一休憩所の津八幡宮を経て、松浦武四郎記念館（松阪市）において昼食の後、施設を見学し、再び出発した。歩いていると伊勢街道の道標や常夜灯、これまで気づかなかった史跡等を見つけながら、本日の終着点松阪の八雲神社へ到着。皆、達成感でいっぱいだった。

菅笠を被り、大人数で歩く姿はさながら当時の様子を思わせ、私達も当時の人々の苦労が多少なりとも体験出来たように感じ、またこういった姿を見てもらうこと自体教化につながるのではないかと思った。

（廣岡靖晃　記）

第三日（二十七キロ）

二十八日、松阪から神宮までの行程に参加した。朝八時に松阪の八雲神社を出発。初夏の心地よい風を受けながら歩いた。旧街道沿いの情緒あふれる常夜灯や旧家が続く町並みと次々と移り変わる情景が疲れも忘れさせてくれた。竹神社にて昼食をとり、さらにはへんば餅も食して午後一時過ぎ外宮に到着。参拝をしてラストスパートに入る。猿田彦神社では宇治土公名誉宮司さんが温かく迎えてくださった。参拝の後、無事に内宮に到着した。皆、達成の喜びと感謝の気持ちに満ち溢れ活き活きとした顔つきをしていた。神楽殿にて紙絵馬を奉納して行事は終わった。

今では交通機関の著しい発達により気軽に参宮が出来るようになったが、今回の行事に参加させて頂き、江戸時代の人々の神宮に対する篤い崇敬の気持ちを感じることができた。

（福井健士　記）

会　報「榊　葉」
第35号
平成21年3月31日
発行者　中野哲彦
編　集　総務広報委員会
発行所　津市鳥居町210-2
三重県神社庁内
三重県神道青年会